書評

『新編 原典 中国近代思想史』全7巻

（岩波書店、2010–2011年）

味岡　徹
久保　亨
嵯峨　隆

30年来の研究の進展を踏まえ，2010年から2011年にかけ『新編原典中国近代思想史』全7巻が刊行された。かつて1976–1977年に刊行され大きな反響を呼んだ『原典中国近代思想史』（以下，旧編と呼ぶ）は，この書評の本文の後に付した新旧対照表（筆者作成）に示されるとおり，今やまったく面目を一新し，読者の前に姿を現している。

この新編の特徴は，旧編に比べ格段に内容が充実し，確実に中国近現代史研究の進展を反映したものになっていることである。まず第一に，収録史料の範囲が広がった。それは，検討の対象とする領域が広がり，多様な政治思潮をカバーするようになっている点にも現れている――その内容については後段で触れる――し，著作集はもちろんのこと，新聞・雑誌からラジオ放送にいたるまでのさまざまなメディアから採録されている点にも現れている。むろんそれは，個々の思想を時代の全体状況のなかで位置づけ，歴史的に評価しようという幅が広がったことの結果でもあった。さらに付け加えるならば，原典を確認する作業が徹底されたことも，新編の特徴の一つに挙げるべきであろう。著作集や全集といった編纂ものに頼らず，個々の史料が新聞・雑誌等に掲載された時の原載文章を確かめ，史料として収録する注意が払われている。

恐らく，以上のような特徴を可能にしたのは，旧編に比べ共同研究的な性格が非常に強化されたことにあった。翻訳担当者と解説担当者が別に配置され，分業化している場合も多く見られるし，多くの巻において

編者も複数になっている。このようになったのは，編集期間の短縮化という事情も影響していたようであるが，結果として集団作業が大きな比重を占めるようになり，共同研究の成果という性格が強まることになった。それに対し旧編は，研究会を基礎に置きつつも，実質的には個人的努力に依存するところが大きかったという。このような変化は，学界を取り巻く状況全体の変動とも無縁ではなかった。

では，どのように多様な政治思潮をカバーするようになっているのか。それは，一言でいえば，革命史に限定されていた枠を突破したことにある。たとえば辛亥革命前後の政治思想についてみると，旧編に収録された史料は，そのほとんどが革命派の政治思想に関わるものであった。それに対し新編は，立憲派と呼ばれた人々を含め，改良主義的な政治思想についても相当の紙幅を割いている。また1940年代の政治思想の場合，旧編は共産党が主役で国民党は全くの脇役に過ぎなかったのに対し，新編は国共両党の双方をほぼ同じ比重で取りあげ，それぞれの政治的主張に関する重要な史料を収録した。

ただし，それで十分かといわれれば，やはりもう一歩進む余地があったのではないかという思いも残る。再び辛亥革命時期を例に取ると，清朝の護持にこだわった保守派の政治思想を知る手がかりはきわめて少ないし，民国前期に活躍した軍人出身の政治家たちについても，ほとんど語られていない。彼らの思想を単純に「後進的」と決めつけるわけにはいかないし，それがある社会集団の意識を体現したものであったことも，配慮すべきであろう。1940年代についても，国共両党以外の政治勢力に対して払われている関心が少ないという傾向を否定できない。

さらに，範囲を広げる，という点からいえば，台湾，東北，日本軍が戦時中に占領していた地域，香港などにおける中国人の思想的営みを反映させることも，大きな課題として残された。

もう一つ考えるべきなのは，思想史研究の領域設定とでも呼ぶべき問題群である。現代社会に生きるわれわれが「思想史」という言葉を聞いた時に思い浮かべるのは，あるいは政治思想史であったり，社会思想史であったりする。いうまでもなく，経済思想史，文芸思潮史といった領域も存在する。要するにかなり広い範囲が「思想史」という言葉に含まれるのである。それでは，近現代の思想史研究は，どこまでを対象領域

にすべきなのか。前近代の思想史の場合，それは主に狭義の思想史であって，哲学史，宗教史などを軸とした知識人の思想史だといっても過言ではない。新編では，とくに現代に近づくにつれ，政治思想史関係の史料が占める割合が非常に大きくなっているのに対し，哲学史や宗教史関係の史料は，ほとんど掲載されていない。このあたりの問題をどう処理していけばよいか，検討を深める必要があるであろう。

また政治思想史に関する史料に即してみても，個々の政局に対応した政論的文章と長期的大局的に政治理念を論じた文章とが混在していることに注意しておく必要がある。政治過程を分析する素材としては前者が決定的に重要であるのに対し，政治思想全体を構造的に把握する上では後者が不可欠となる。二種類の史料をどのように判断して採録するか，やはり編集者の歴史眼が問われる問題になるのかもしれない。

以下，各巻の内容に即して検討を進める（新旧対照表も参照）。

第1巻　開国と社会変容

（責任編集：並木頼寿，編集協力：茂木敏夫，菊池秀明）

第1巻は，18世紀末からアヘン戦争，太平天国の乱を経て19世紀最終年の義和団事件までの100年余りを対象時期としている。これは，旧編第1冊「アヘン戦争から太平天国まで」が1810年代から1860年代前半までのおよそ50年を扱っているのと比較すると，始まりも終わりも長くなっている。

旧編は，近代中国を「反帝・反封建」の「人民の革命闘争の時代」（第1冊「総序」）ととらえていた。その観点からアヘン戦争と太平天国を重視したが，とりわけ太平天国を反帝・反封建の「目標を先駆的に提示」した「1つの全体的な革命」（第1冊「第一部解説」）として高く評価した。このため旧編では，太平天国関係の記述は解説を含めて，「総序」を除く全体記述のおよそ73%を占めるにいたった。

本巻の史観と構成はこれとは異なる。本巻は，18世紀末頃より清朝の体制は制度疲労を起こし，外からは西洋が従来の関係の変更を求めるようになったという観点に立ち，この二大問題がどのように思索されたかを追うためにさまざまな史料を集めている。本巻は太平天国については，「清朝に代わる伝統王朝の創設をめざした復古主義的な運動」（「解説」）

と規定している。

第1章「清代後期の思想状況」は，白蓮教の反乱などによる社会秩序のほころびに対する魏源，龔自珍らの改革案を紹介している。

第2章「開国と対外認識」は，アヘン問題，アヘン戦争後における知識人の世界認識，西洋人の中国論などを取り上げる。アヘン問題に関して，林則徐の厳禁論とは対極の許乃済の弛禁論を掲載しているのは，本巻の視点の広さを示している。

第3章「太平天国―民衆反乱の連鎖と体制再編」は，太平天国と上海小刀会，捻軍などの諸反乱を扱うが，旧編が曾国藩の「檄文」以外は太平天国側の文献のみを載せていたのとは異なり，「乙丙日記」，「思痛記」といった内乱に巻き込まれた知識人の日記，回想も載せている。

第4章「仇教運動から義和団の活動へ」は，1862年の南昌教案，1870年の天津教案などの「仇教」問題と義和団を扱う。義和団については，ビラ3件，清朝内の親義和団派と反義和団派の文書各1篇，さらに在野の改革派知識人の義和団論を収載している。これは，旧編第3冊が義和団に関する民話1篇と民謡1篇を収めるのみであったのに比べて充実したと言えよう。

本巻は旧編第1冊が史料36篇を収めているのに対し，義和団関係4文献を含めて，計45篇を収めている。このように多数を収載できた理由は，ひとつには本シリーズが抄訳を容認していることであり，もうひとつには1980年代以降新史料が見つかったことであろう。梁発の「勧世良言」，李秀成の供述書などの収載は前者の方針の成果，また「天父聖旨，天兄聖旨」，洪仁玕の供述書などの収載は後者の成果と言えようか。

本シリーズの特徴の1つは，旧編で辛亥革命を扱った第3冊の冒頭に置かれている義和団関係史料を，本巻に収めたことである。編集者は義和団事件を清末の反キリスト教運動の流れの中に位置づけてこのようにしたという（「解説」）。ただ編集者は一方で，義和団はナショナリズムを掲げて「戊戌変法が超えられなかった改良運動の限界を乗りこえようとする試みだった」（「解説」）と言う。それならばその観点に沿って戊戌変法を扱った第2巻で取り上げる手もあったのではないかと思われる。

第2巻　万国公法の時代―洋務・変法運動

（責任編集：村田雄二郎，編集協力：茂木敏夫）

第2巻は1861年（総理衙門設置）から1900年（自立軍蜂起）までの40年を扱っている。これは旧編第2冊とほぼ同じである。

編者は旧編の「洋務運動と変法運動」に代えて「万国公法の時代」を主題とし，「洋務・変法運動」を副題とした。それは，国際秩序との「自覚的対峙」とそこへの「主体的参入」がこの時代の思想営為と各種変革論（および変革反対論）の主軸をなした（「解説」）という認識に基づく。

旧編第2冊は章立てがなく，洋務運動と変法運動に関する文献を時期順に配列するスタイルとなっていたが，新編は5章を立てている。

第1章「『万国公法』世界への参入」は，主に外交に関する総理衙門や外交官の言論を収めている。第2章「自強運動の展開」は，いわゆる洋務運動や領土問題に関する史料を収めている。「自強運動」の呼称は，編集者によれば，「洋務運動」とほぼ同義だが，「洋務」では「時代や地域・個人によって多様な形態を示す思想のふくらみや広がり」が見過ごされること，また洋務と変法の質的違いを担い手やイデオロギーによって分けることが困難であることなどから選択されたという（「解説」）。

この「洋務・変法」を無理に区分しない立場から，第3章「中学と西学」では，日清戦争後に「中体西用」論として完成する中学と西学の関係をめぐる議論が紹介され，第5章「変法運動」では日清戦争後における制度改革すなわち変法をめぐる議論が提示される。

第4章「日中関係」は日本との直接的関係や琉球，朝鮮問題に関する言論を収める。日中関係という章は他の巻に見られず，本巻の特色のひとつとなっている。編者は「日中関係の現状と将来を思考する」ために本章を立てたという。編者は第1章でも日中関係をめぐる言論を載せている。

旧編は変法運動を重視し，同運動に関係する文献の比率が61％（18篇中11篇）と高かったが，新編では36％（33篇中12篇）となり，バランスがよくなった。康有為の著作が旧編では5篇であったが，新編では3篇に減った。史料の選択で，李鴻章と森有礼，馬建忠と劉錫鴻など，対立する議論の両者を掲載しているのも，本巻の長所と言えよう。

本巻はいわゆる自強（洋務）運動を単純に一体のものとして扱うので

はなく，西洋からの技術導入や領土・属地防衛論に関する第2章と西学摂取をテーマとした第3章に分割している。これは編者の新しい工夫と言えよう。しかし第2章のみに「自強運動」の呼称を使い，第3章を「中学と西学」とするのでは，その分割の意図は伝わりにくいのではないだろうか。

ここで第1巻と第2巻の時期的関係についても見ておきたい。両巻はその対象時期が，開始時期は異なるが，終了時期はほぼ同じであり，1861年からの40年間は重なっている。これは旧編を踏襲したものであるが，こうした時期の長期の重なりは3巻以降は見られない。第1巻が国内の社会矛盾および西洋との軍事的また文化的対立を扱い，第2巻が西洋文化の取り入れと改革運動を扱うという区分は，有効性がないとは言えない。しかし本シリーズの中でこの両巻のみ，時期ではなく分野で巻を分けるのは統一性を欠くのではないだろうか。

第3巻　民族と国家

（責任編集：村田雄二郎，編集協力：深町英夫，吉川次郎）

本巻の対象時期は1894年から1911年まで，実質的には革命が政治の表舞台に登場した後の10年，すなわち1901年から1911年までである。編者によれば，この時期における革命と立憲という清末の二大政治潮流のうち，旧編はもっぱら前者を基軸とした構成をとっていたが，新編では革命と立憲の二本柱で清末思想史を描き出そうとしており，この点に新旧の最大の相違があるとされる。旧編と異なる今一つの点は，「民族と国家」及び両者の関係について重きを置いていることである。かつての革命派を基軸とする思想史では，種族・民族・国民という新たな概念やカテゴリーが現実の革命思想と切り結んできた関係に十分な関心が払われてきたとは言い難いものがあった。新編では，これまで軽視される傾向にあったネーション内部のエスニックな差異について着目している。

第1章「革命思想の形成」，第2章「革命思想の展開」の史料は1篇を除いて旧編に収録されていたものである。この時代を代表する思想家として，章炳麟と孫文の著作に偏る傾向が生じるのはある程度やむを得ないことかもしれない。しかし，辛亥革命の多元的理解を可能にするためには，より多様な人物（例えば，宋教仁，黄興，朱執信など）も取り上げ

られる余地はあったように思われる。また，新編の編集の過程で，革命思想の中から無政府主義は全て削除されたが，旧編所収の史料の中には歴史的価値の高いものもあり，一括して削除されたことは些か残念に思う。第3章「立憲改革」と第4章「民族と国民」は新たに加えられた章であり，史料は全て新規の収録である。第3章には清朝による改革政策の史料と立憲主義者たちの論説，意見書が収録されているが，張謇の著作からは清朝の対応の鈍さに対する強い憤りが窺える。第4章の史料からは，辛亥革命時期の民族と国民をめぐる議論が，今日のチベットやウイグルの問題に通底するような内容を秘めていたことが理解される。また，楊度「金鉄主義説」と章炳麟「中華民国解」は政治的立場が異なるにも拘わらず，微妙な点で重なりを見せていることは興味深いものがある。

翻訳と解題に関しての旧編と新編の最大の違いは，旧編では訳者が解題を執筆していたのに対し，新編では必ずしもそうはなっていないことである。それは，史料によっては底本を初出あるいはそれに近いものに代え，旧編を参考にしながら新たな翻訳を行ったうえで，新たな訳者が解題を執筆していることによる。翻訳の底本を，初出あるいはそれに近いものに代えたことにより，史料の原型が提示できたことの意義は大きい。例えば，章炳麟「支那亡国二百四十二年記念会発起文」は，新たにオリジナルから訳出したため，旧編の訳文とは大きく異なっている。また，孫文「支那の保全・分割について合わせ論ず」も同様であり，それにより旧編では全編「中国」という語句で統一されていたが，新編では本来の「支那」に改められている。いずれも，原型に復したという点では評価されてよいであろう。解題に関して言えば，旧編から30年余りを経ての近代史研究の進展がそこに反映され，全般的に厚みを加えている。孫文を例に取れば，旧編では個々の史料に関しては事実関係のみが記されている程度であったが，新編ではその思想的営みのための社会環境を提示するなどやや詳細に渡るようになった。第3章と第4章の新規史料の解題については，それぞれ内容と背景についての適切な説明がなされているとの印象を持った。

第４巻　世界大戦と国民形成

（責任編集：坂元ひろ子，編集協力：吉川次郎）

本巻の対象時期は，1912 年の中華民国の成立から国民革命期までである。編者はこの間の，第一次世界大戦とそれに続くロシア革命という時代性，早期グローバル化時代の思想の連鎖を重視しようとする。それは，民族･国民国家の創出の時代状況の中で，個人と民族，国家，社会，ジェンダーとの関係が自覚された時代であった。こうした点への着目は，旧来の革命史観とは異なる，新文化運動をより多面的・重層的に見て行こうとする姿勢の現れであり，そこには脱政治的接近という側面も窺える。また，旧編ではこの時期の文化の「新しさ」の側面を強調する傾向に主眼が置かれているのに対し，新編ではそれと同時に中国文化の「固有性」を強調する傾向にまで目が向けられている点で特徴的である。新文化運動における反伝統主義的傾向を「グローバル化」の一環と捉えるなら，当然それは東方＝中国の独自性の主張を始め，様々な分野でのアイデンティティの希求を引き起こさざるを得なかったのである。

第１章「辛亥革命の挫折と反省」は，新たな政治状況に期待し挫折する知識人の著作を収める。第２章「新文化運動」の第１節「伝統文化批判」は従来からの新文化運動の中心と見なされてきた分野であるが，収録史料の中には「新中華民族主義」のように，この節のタイトルで括れるか疑問なものもある。第２節「平民主義と『社団』」の史料からは，平民が労働に従事しつつ教育の機会を得，互助精神を以て共同生活の可能性を求めたことが理解される。第３節「家庭・結婚・ジェンダー」では，結婚，女子教育，家庭，産児制限と優生学を扱った史料が取り上げられている。概ね本巻の前半においては，革新思想のみが取り上げられており，政治・文化両面の保守思想には目が向けられていない憾みがある。民国初年の孔教運動などを考える場合，この点は検討すべき余地があるのではないか。第３章「五四運動とその展開」からは，知識人たちが新文化・新思潮の下での緩やかな連携状態から，マルクス主義流入によって分岐して行った状況が理解される。旧編に比べ李大釗の著作が減少し，新たに胡適が採録されていることは，現在の研究状況を反映している。第４章「国共合作と国民革命」はこの間の代表的政論より構成されるが，戴季陶「三民主義の哲学的淵源」と李大釗「孫文主義における

国民革命と世界革命」は，孫文思想の正統性をめぐる左右両端の立場を窺い知る上での好個の史料である。第4章「アイデンティティを求めて」は，「東西文化論争」「科学と人生観論争」などに関する史料からなる。

翻訳と解題について言うなら，本巻では旧編から再録された史料は全て改訳という形を取っており，これによって，旧編での不明確・不的確な訳もかなり改められたと言える。こうしたことは翻訳技術の進歩にもよるのであろうが，それに加えて，旧編が出版された30年前では確かめようがなかった事柄が，今日においてはインターネットによって，原史料の確認が可能になったことも大いに関連しているであろう。また本巻では，旧編から再録された史料は改訳者が，そして新規収録の史料は原則として訳者が解題を執筆している。再録された史料では，解題もほぼ旧編を踏襲しているが，データが増えたものが多く見られ，全体的に内容を理解させるに十分なものとなっている。

第5巻　国家建設と民族自救

（責任編集：野村浩一，近藤邦康，村田雄二郎，編集協力：光田剛，中村元哉）

第5巻は，1926年（北伐開始）から1937年の日中戦争開戦前までのおよそ10年を扱っている。旧編第5冊は章区分を設けずに，1920–40年代の毛沢東著作12篇にいわゆる「文芸講話」（1942年）の附録として王実味，丁玲の各1篇を加えた構成になっている。同冊との関係について言えば，本巻は毛沢東の日中戦争以前の著作3篇を継承したのみで，実際上全く新たに編集されたものである。

第1章「国民革命の展開と動態」は北伐とソビエト革命初期の時期の蔣介石，毛沢東，魯迅の著作を収める。第2章「南京国民政府の成立」は，訓政論のほかに「人権論争」，「民主と独裁」論争を盛り込んでいる。第3章「満州事変」は，政治家，知識人の救国論と蔣介石の新生活運動の主張を収める。第4章を挟んで第5章「毛沢東の戦略と哲学」は，毛沢東の1936–37年の4篇の著作を収めている。この4つの章は，北伐から日中戦争開始までの内外政治の展開を跡づける史料によって構成されている。

それらに対して第4章「民族自救と文化・学術の地平」は，そうした

中央の政治，軍事の現実からやや離れた知識人たちの活動を扱っている。第1節「農村・都市・ジェンダー」は，郷村建設運動などの社会運動，映画評論，女性の権利に関する言論を取り上げ，第2節「科学と救国」は政治制度改革論，経済発展論などを収める。第3節「辺境の危機」は，満州事変後に知識人が取り組んだ国土を守るための学術活動を取り上げている。

同章の第4節「全面的西洋化および本位文化をめぐる論争」は，満州事変後の国家的危機の中で，中国を強国にしていくために西洋の文化と中国の文化に対してどのような態度を取るべきかという問題をめぐる論争を紹介している。所収の4篇のうちの王新命ほか「中国本位の文化建設宣言」（1935年1月）と胡適「『中国本位の文化建設』なるものを試評する」（1935年3月）の2篇は旧編第6冊にも収められているが，毛沢東「新民主主義論」（1940年）の付録として，その「新民主主義の文化」論に劣るものとして掲載されている。新編は本節を立てることで両篇の本来の意義を明確にした。

本巻は，1920年代後半からのいわゆる「南京の十年」を多方面から捉えることに成功していると言えよう。翻訳の質もよい。ほかのいくつかの巻同様，新しく訳した資料が多く，その作業はたいへんであったと思う。

本巻は計48篇の史料を収めており，十分な篇数と言えよう。しかしそれでも望みたいものがいくつかある。そのひとつは，1930年代前半の憲法制定をめぐる議論である。孫科の「憲法と三民主義」は収められているが，訓政時期の基本法となった「訓政時期約法」や法学者らの憲法案を合わせて収載してもよかったのではないか。もうひとつは「西安事件」である。政局の大きな転換をもたらした同事件は，本巻の巻頭の解説，地図，年表で取り上げられているが，文献は1つもなく，残念に思う。

第6巻　救国と民主：抗日戦争から第二次世界大戦へ

（責任編集：野村浩一，近藤邦康，砂山幸雄，編集協力：深町英夫・中村元哉）

日中戦争期を扱った第6巻は，旧編に比べ最も大きく変化した巻の1

つである。毛沢東，魯迅，民主派知識人らの論著を収めていた旧編の構成が抜本的に改変され，蔣介石のような国民党政権首脳を含むさまざまな人々の文章が収録された。その史料選択の基準として，編者は，(1) 抗日戦争の3つの局面（抗戦初期，戦略的対峙，世界大戦）ごとの政治的文書，(2) 共産党の指導体制構築と毛沢東の台頭過程に関わる政治的文書，(3) 抗戦期の知的営為の中で，直接に戦争や政治に関わるものではない重要文書，の3点を提示している（2–3頁）。このうち，とくに (3) に即して編まれたと思われる文化と社会に関わる文章群は，日中戦争期の実り豊かな思索の跡を示し圧巻である。ただし全体としてみると，編者自身も認めるように国共両党，知識人らの政治的文書が多くなり，思想史としての独自の問題領域を探る余地を狭めてしまった感がある。そうした選択も歴史研究・歴史教育にとって十分価値あるものだとはいえ，今一歩，思想史史料集としての差別化を探る可能性はありえたかもしれないとの思いを付け加えておく。この時期についていえば，既存の『中国共産党史資料集』（日本国際問題研究所編），『世界史史料』（歴史学研究会編）などが，基本的な政治的文書を収録しているという事情もある。

第6巻に収録された政治的文書の内容に即していえば，中国共産党の八・一宣言が掲載されていないことに，若干の疑問を抱いた。1935年の八・一宣言は，コミンテルンの指導下，モスクワで起草されパリで発表された文書であり，中国共産党の主流派が起草したものではないとの判断が働いたのであろうか。上述のような既存の史料集に収録されているので省略したのかもしれない。いずれにしても，なぜ省略したか，関連項目の解説などで説明しておくべきだったのではないか。

また国民党政権，共産党，いわゆる第三勢力系の動きなどが，それぞれ別扱いされる傾向が見られることも気になった。1949年以降，台湾の国民党政権と大陸の共産党政権とが，きわめて異なった政治環境の下で活動したことは明らかである。しかし，少なくとも戦時期から戦争終結直後に開催される政治協商会議（1946年1月）の頃までは，国民党政権も，共産党も，第三勢力も，同じ政治的舞台の上で活動を展開していた。たとえば，国民党の第6回全国大会と共産党の第7回全国大会は，1945年の春，同じ時期に並行して開かれ，明らかに両者はお互いを意識していたし，彼らの動向を見る国民もまた，両者を比較しながら戦後

中国の行方を考えていた。この時期の彼らの政治的文書が持った意味を理解するには，そうした相互の位置関係を常に意識して読み解く必要がある。当然のことであるとはいえ，こうした史料集のあるべき姿を考えるため，あえて記しておく。

さらに収録範囲の点からいえば，冒頭でも触れたとおり，台湾，東北，華北・華中等の日本軍占領地域，香港などにおける中国人の思想的営みを反映させることも，今後の大きな課題として残された。戦時中，都市民衆と知識人の大多数が日本軍占領下で暮らしていたという事実は重い。編者自身もその必要性に触れている汪精衛政権関係の政治思想文献（3頁）にとどまらず，日本占領下の北京で暮らした周作人，上海文芸界で一世を風靡した張愛玲，戦時期に香港に集まった映画人，文化人らの動向などが，戦後中国の文化と思想の理解に欠かせない意味を持っていることを直視すべきである。

第7巻　世界冷戦のなかの選択：内戦から社会主義建設へ
（責任編集：砂山幸雄，編集協力：中村元哉）

戦後中国は，旧編でほとんど扱われていなかった時代であり，その時代に関する史料をまとめた第7巻は，まったく新しく編集された巻だと言っても過言ではない。まずはその労苦に敬意を表しておきたい。本巻で提示されている選択基準は下記のとおりである。(1) 4つの論争ないし論議関連（中間路線，憲政と文化，思想改造，社会主義改造），(2) 抗日戦争直後期，及び国共内戦～建国初期の状況認識，将来展望，(3) 中国社会論，ジェンダー論（2–3頁）。仮に（1）を論争系，(2) を政局系，(3) を思想系と呼ぶことにすると，それぞれの主題によって異なる種類の史料が選択されており，戦後の中国思想界が非常に多様化し，多元化していたことが理解される。とはいえ，かなり種類の違う史料が配列された結果，やや戸惑う部分が生じていることも否定できない。たとえば，論争系の場合，1940年代後半の2つの論争に関しては総合誌などに掲載された文章が数多く掲載され，そこから豊かな思想内容を汲み取ることも可能である。それに対し1950年代の思想改造・社会主義改造に関しては，いわば政治宣伝・政治教育に近い論説や新聞報道の類が並べられている印象を受ける。共産党政権によって「思想改造」を迫られた知

識人が残した痛ましい改悛発言には，メディアを掌握していた政権側による意図的な改ざんも考えるべきであろう。一方，政局系の場合，たんなる政治宣伝的な文書は少ないとはいえ，それぞれの史料の背後にある政治思想まで読み取るのは難しい政策文書ないし政論的な文書が大部分を占める。そして，おそらく最も思想史的な史料というにふさわしい雰囲気を漂わせているのが，中国社会論とジェンダー論に収められた史料群である。このように主題と時期によって著しく異なる種類の史料が選択され並べられていることに，やや戸惑いを感じた。

ただし1950年代の思想改造・社会主義改造の場合，残されている史料の質と量，さらにその利用条件によって制約されている面が大きいのであって，編者だけを責めるのは酷であろう。政治宣伝・政治教育的な文章が多くなるのはやむを得ないことかもしれない。それにしても，たとえば歴史学者顧頡剛の大部の日記（台湾で刊行），文学者蕭乾の回想録（香港で刊行）など，以前は公表されていなかったもので，近年，利用が可能になった史料の中には，当時，知識人たちが置かれていた思想状況に関し，彼ら自身の言葉を通じて窺い知ることのできるような叙述を探し出す余地が広がってきていると思われる。

また政局系に関していえば，旧編より格段に充実したとはいえ，依然として国民党政権に近かった人々の政治思想関係史料は少なく，とくに台湾に移った胡適，傅斯年，雷震といった知識人たちの政治思想に関する史料が欠如しているのは寂しいというほかない。そもそも大陸に残った知識人たちだけに着目して1950年代の政治思想を探求することには，大きな限界があるのではないか。自立した政治思想を持っていた有力な知識人の少なからぬ部分が，共産党政権の思想弾圧を恐れ台湾に移動していたからである。彼らの思想的営為を視野の外に置いて，20世紀中国の政治思想史を語ることはできない。

補記：この書評は3人の筆者の討議と第24回民国史論の会（2012.9.29）における議論に基づき，下記の分担で執筆した（50音順）。味岡徹：第1巻，第2巻，第5巻，久保亨：第6巻，第7巻，冒頭のまとめ，嵯峨隆：第3巻，第4巻。

資料：『原典中国近代思想史』新編・旧編対照表

記号凡例　†：旧編になく新編で追加された史料　△：旧編にあり新編で削除された史料

〔　〕：旧編の別の冊に収録されていた史料の冊数表記。

新編　第１巻　開国と社会変容

1　清代後期の社会と思想状況

†Ⅰ①1　策略　厳如熤

†Ⅰ①2　練郷兵対　包世臣

Ⅰ①3　『皇朝経世文編』序　魏源

Ⅰ①4　平均について　龔自珍

†Ⅰ①5　西域に省を置く提案　龔自珍

†Ⅰ①6　郷職を復するの議　馮桂芬

†Ⅰ①7　節婦説、貞女説　兪正燮

2　開国と対外認識

(1) アヘン問題と対英戦争

†Ⅰ②1　アヘン厳禁政策の修正に関する上奏　許乃済

Ⅰ②2　銀の流出を防ぎ、国本を培うことを論ずる上奏　黄爵滋

Ⅰ②3　広州貿易を改善し正常化するための構想　林則徐

Ⅰ②4　乾隆帝のイギリス国王に対する勅諭　乾隆帝

(2) 世界認識の拡大

Ⅰ②5　『海国図志』原序、後序　魏源

旧編　第１冊　アヘン戦争／農民革命の思想

序説　アヘン戦争

1　公羊学派の思想

△乙丙〔1815–16 年〕の頃の覚え書き（其の九）龔自珍

△「私」について　龔自珍

『皇朝経世文編』序文　魏源

平均について　龔自珍

△隠逸を尊ぶ　龔自珍

△読書ノート（抄）　魏源

2　アヘン戦争への対応

銀の流出を…防ぎ、国本…論ず（上奏文）　黄爵滋

曾望顔の上奏文についての覆奏文　林則徐

英国国王に対する諭告文草稿　林則徐

『海国図志』序文　魏源

3　民衆の反英闘争

△全広東義士義民の檄文　銭江・何大庚

△広東各郷住民の英夷への告諭

†Ⅰ②6　瀛環志略（抄）徐継畬
(3) 開港場情報の形成とキリスト教
†Ⅰ②7　勧世良言（抄）梁発
†Ⅰ②8　イギリス東インド会社の起源 前編・後編　『遐邇貫珍』
†Ⅰ②9　中国と西洋の祭祀の異同について　エドキンス
3　太平天国―民衆反乱の連鎖と体制再編
(1) 洪秀全と上帝信仰
Ⅰ③1　天父聖旨、天兄聖旨（抄）蕭朝貴・楊秀清
†Ⅰ③2　洪秀全の幻想（抄）ハンバーグ
Ⅰ③3　原道醒世訓、原道覚世訓　洪秀全
Ⅰ③4　天条書　上帝会
Ⅰ③5　頒行詔書　太平天国
(1) 天を戴いて妖を討伐し、世を救い、民を安んずる布告
(2) 天を戴いて胡を討つ檄
(2) 太平天国政権の構想
Ⅰ③6　天朝田畝制度　太平天国
Ⅰ③7　資政新篇（抄）　洪仁玕
Ⅰ③8　売春、アヘンなどを禁止した布告　韋俊他
Ⅰ③9　羅大綱、呉如孝のボンハム英公使への書簡　羅大綱
Ⅰ②9　東王楊秀清のボンハム英公使宛文書　楊秀清
Ⅰ③10　幼賛王蒙時雍らのビナム海軍中佐宛返書　蒙時雍他
(3) 太平天国と中国社会
△民謡2篇
第一部　農民革命の思想
1　挙兵以前の思想と運動
天王の長兄…啓示についての証言　洪仁発等
△太平天国年代記　洪仁玕
原道救世歌、原道醒世訓、原道覚世訓　洪秀全
天条書　上帝会
2　挙兵前後から南京占領まで
△天命詔旨書　楊秀清他
△太平軍軍律 (1) (2) 太平天国
頒行詔書　太平天国
(1) 天を戴いて妖を討伐し、世を救い、民を安んずる布告
(2) 天を戴いて胡を討つ檄
△ (3) …すべての子女を救う布告
△幼学詩
3　政権樹立後の思想と政策〔対内政策〕と〔対外政策〕
天朝田畝制度　太平天国
庶政刷新に寄与するための新提案　洪仁玕
△土地問題にかんする2つの布告　天王他
売春、アヘンなどを禁止した布告　韋俊他
△空文、巧言を戒める教え　洪仁玕
△帰順した清の官僚…との質疑応答　洪仁玕

†Ⅰ③11　李秀成の供述書（抄）李秀成
†Ⅰ③12　洪仁玕の供述書（抄）洪仁玕
†Ⅰ③13　乙丙日記（抄）汪士鐸
†Ⅰ③14　思痛記（抄）李圭
Ⅰ③15　粤匪を討伐すべき檄文　曾国藩
(4) 民衆宗教・民族社会・地方武装組織などの動向
Ⅰ③16　上海小刀会の首領劉の告示　劉麗川
Ⅰ③17　捻軍首領張洛行の告示（1）張洛行の告示（付軍律）
（2）張洛行と太平軍将領の共同告示　張洛行他
Ⅰ③18　山東の黒旗軍の告示２通　楊太
†Ⅰ③19　杜文秀と大理漢人紳士の訴え　恩桂他
(5) 体制の危機とその打開への模索
†Ⅰ③20　西商租地、開捐例　毛祥麟
†Ⅰ③21　局外傍観論　R. ハート
†Ⅰ③22　天文算学館についての反対意見倭仁
4　仇教運動から義和団の活動へ
(1) キリスト教布教と「仇教」
†Ⅰ④1　湖南全省による檄文
†　南昌教案の処理に関する沈保楨の上奏　沈保楨
†Ⅰ④2　天津教案への対応に関する上諭　同治帝
†　戦闘の回避を求める曾国藩の上奏　曾国藩
Ⅰ④3　伝教上・下　王韜

前期の対外文書３通　(1) 羅大綱…書簡　羅大綱
△　(2) …北王と翼王が…通知書　北王他
(3) 東王楊秀清の…文書　楊秀清
後期の対外文書４通　(3) 幼賛王蒙時雍らの返書　蒙時雍他
△　(1) …忠王…公使…書簡　李秀成
△　(2) 忠王…領事…書簡　李秀成
△　(4) …黄呈忠…領事…　黄呈忠
粤匪を討つの檄　曾国藩
4　太平天国以外の諸結社の思想
上海小刀会の告示ほか　(1) …劉の告示　劉麗川
△　(2) 劉麗川から天王への上奏文　劉麗川
△　(3) 平胡大都督李の告示　李咸池
△広東天地会の一首領陳開の「自述」 陳開
捻軍の告示２通（1）張洛行告示（付軍律）
（2）張洛行と太平軍将領の共同告示張洛行他
山東の黒旗軍の告示２通　楊太
△貴州省の会党楊隆喜の布告（1）（2）楊隆喜
5　太平天国についての民間伝承
△歌謡と伝説（1）（2）（3）（4）

(2) 義和団の蜂起（義和団関係は第3冊）
†Ⅰ④4　山東の教案処理に関する上奏　毓賢
†Ⅰ④5　義和団のビラ3件　義和団
†Ⅰ④6　義和団は中国に功績あることを論ず　『横浜開智録』
†Ⅰ④7　崇陵伝信録（抄）　惲毓鼎

新編　第2巻　万国公法の時代
1 「万国公法」世界への参入
†Ⅱ①1　万国律例の刊行を要請する上奏文　総理衙門
†Ⅱ①2　使西紀程、郭嵩燾日記（抄）　郭嵩燾
†Ⅱ①3　変法薛福成変法　薛福成
†Ⅱ①4　日本の朝鮮に対する使節派遣について　李鴻章
†　附録1　日本公使森有礼・代理公使鄭永寧との会談録　李鴻章
†　附録2　李鴻章との談話筆記　森有礼
2　自強運動の展開
Ⅱ②1　洋式鉄工所・機械の設置についての上奏文（抄）李鴻章
†Ⅱ②2　新疆問題上奏文（1）…総合的に企画する上奏文　左宗棠
†　(2) イリ回収問題…答申　左宗棠
†Ⅱ②3　富民説　馬建忠
†Ⅱ②4　西洋に倣った鉄道の導入に反対する上奏文　劉錫鴻
†Ⅱ②5　チベット問題に関し李鴻章におくった書簡　曾紀沢
†　附録　曾紀沢の意見書　曾紀沢

旧編　第2冊　清末改良主義思想：洋務運動と変法運動
〔旧編第2冊は章区分なし〕
洋式鉄工所・機械の設置についての上奏文（抄）李鴻章
西学を採るの議　馮桂芬
盛世危言（抄）（1）道器　(2) 議院・上　鄭観応
変法・上　王韜
洋務はその長ずる所を用うる　王韜
西洋諸国の民を導き財を生ずるの説　薛福成
機器を用いて財を殖やし民を養うの説　薛福成
勧学篇（抄）(1) 内篇第七　(2) 外篇第三　張之洞
清帝にたてまつる第一の上書　康有為
△清帝にたてまつる第六の上書　康有為
△大同書（抄）康有為
「日本明治変政考」序　康有為
君主政治より民主政治への推移の道理について　梁啓超
中国積弱の根源について（抄）　梁啓超

3　中学と西学―道器／本末論
Ⅱ③1　西学採用の議　馮桂芬
Ⅱ③2　盛世危言（抄）（1）道器　（2）議院・上　鄭観応
Ⅱ③3（1）変法・上　（2）洋務はその長ずる所を用うる　王韜
Ⅱ③4（1）西洋諸国で民を導いて財を生ずることについて　薛福成
（2）機械を用いて財を殖やし民を養うことについて　薛福成
†Ⅱ③5　翻訳書院設立案　馬建忠
†Ⅱ③6『泰西新史攬要』訳本序　ティモシー・リチャード
Ⅱ③7　勧学篇（抄）（1）内篇第七　（2）外篇第三　張之洞
4　日中関係
†Ⅱ④1　琉球問題に関する李鴻章への書簡何如璋
†　附録　アメリカ前大統領グラントとの会談録李鴻章
†Ⅱ④2　朝鮮策略　黄遵憲
†Ⅱ④3『循環日報』興亜会関係論説
（1）日本の興亜会設立について
（2）中日両国間の嫌疑を取りのぞくべきことについて
（3）興亜会は、弊害を防ぐべきである
†Ⅱ④4　日本雑事詩（抄）　黄遵憲
†Ⅱ④5　観光紀游（抄）　岡千仞
5　変法運動
Ⅱ⑤1　清帝にたてまつる第一の上書　康有為
Ⅱ⑤2『日本変政考』序　康有為

仁と学（全文）　譚嗣同
「礼運」注（抄）　康有為
△韓愈を駁す　厳復
時勢の激変について　厳復
△自立会規約序文　唐才常

Ⅱ⑤3　君主政治より民主政治への推移の道理について　梁啓超
Ⅱ⑤4　中国積弱の根源について（抄）　梁啓超
Ⅱ⑤5　仁学（抄）　譚嗣同
Ⅱ⑤6　礼運注（抄）　康有為
†Ⅱ⑤7　『天演論』自序　厳復
Ⅱ⑤8　時勢の激変について　厳復
†Ⅱ⑤9　正気会序　唐才常
†Ⅱ⑤10　白話は維新の根本である　裘廷梁
†Ⅱ⑤11　戒纏足会序　梁啓超
†Ⅱ⑤12　(1) 邵陽士民による乱民樊錐追放の告示　蘇輿
†　　(2) 樊錐『開誠篇』への反駁　蘇輿

新編　第3巻　民族と国家：辛亥革命
1　革命思想の形成
Ⅲ①1　ハワイ興中会章程　孫文
Ⅲ①2　香港興中会章程　孫文
Ⅲ①3　順民『国民報』
Ⅲ①4　中国滅亡論『国民報』
Ⅲ①5　支那亡国242年記念会発起文　章炳麟
Ⅲ①6　革命軍（抄）　鄒容
Ⅲ①7　龍華会章程（抄）　陶成章
Ⅲ①8　軍政府宣言　中国同盟会

旧編　第3冊　民国革命の思想：辛亥革命
Ⅰ　義和団
△義和団民話「劉黒塔」孟老人
△義和団民謡 (1) (2) (3) (4)
Ⅱ　辛亥革命
1　宣言・檄文
興中会章程〔ハワイ〕　孫文
興中会章程〔香港〕　孫文
支那亡国242年記念会啓　章炳麟
龍華会章程（抄）　陶成章

Ⅲ①9　亜洲和親会規約　章炳麟
Ⅲ①10　『中国女報』創刊の辞　秋瑾
Ⅲ①11　『民報』と『新民叢報』との論戦の大綱　『民報』
2　革命思想の展開
(1) 一人一人の革命思想――浙江派
Ⅲ②1　客帝　章炳麟
Ⅲ②2　播種　章炳麟
†Ⅲ②3　独を明らかにする　章炳麟
Ⅲ②4　演説録　章炳麟
Ⅲ②5　革命の道徳　章炳麟
Ⅲ②6　光復軍告示　徐錫麟・陳伯平
Ⅲ②7　暗殺時代（抄）呉樾
(2) 一省の自立――湖南派
Ⅲ②8　新湖南（抄）楊毓麟
Ⅲ②9　絶命書　付跋　陳天華
Ⅲ②10　萍瀏醴起義檄文　龔春台
Ⅲ②11　中国同盟会中部総会宣言
(3) 一国の革命方略――広東派
Ⅲ②12　支那の保全・分割について合わせ論ず　孫文
Ⅲ②13　中国問題の真の解決　孫文
Ⅲ②14　東京留学生歓迎会における演説　孫文
Ⅲ②15　三民主義と中国の前途　孫文

軍政府宣言〔同盟会宣言〕　中国同盟会
亜洲和親会規約　章炳麟
『中国女報』創刊の辞　秋瑾
『民報』と『新民叢報』との論戦の大綱　『民報』
2　革命思想の形成
順民　『国民報』
中国滅亡論　『国民報』
革命軍（抄）　鄒容
3　一人一人の革命道徳―浙江派
『客帝』のあやまりを正す　章炳麟
播種　章炳麟
演説録　章炳麟
革命の道徳　章炳麟
光復軍告示　徐錫麟・陳伯平
△インド　シーヴァジー王記念会の事を記す　章炳麟
　付録　インドのブラーハン、ボース両君を送る序　章炳麟
△鉄錚に答える　章炳麟
△光復軍起義檄稿　秋瑾
暗殺時代（抄）呉樾
4　一省の自立―湖南派
新湖南（抄）　楊毓
絶命書　付跋　陳天華

3　立憲改革
†Ⅲ③1　変法の上諭
†Ⅲ③2　在米諸華僑に立憲を論じた書簡　康有為
†Ⅲ③3　科挙廃止の上奏文　袁世凱他
†Ⅲ③4　開明専制論（抄）　梁啓超
†Ⅲ③5　ただちに国会を開くことを求める意見書　張謇
4　民族と国民
†Ⅲ④1　中国史叙論　梁啓超
†Ⅲ④2　新民説（抄）　梁啓超
†Ⅲ④3　金鉄主義説（抄）　楊度
†Ⅲ④4　中華民国解　章炳麟
†Ⅲ④5『大同報』序　烏沢声
†Ⅲ④6　満漢融和辦法八条　端方
†Ⅲ④7『国粋学報』序　黄節
†Ⅲ④8　…大阪博覧会…台湾女性事件の調査　『遊学訳編』
†Ⅲ④9　女界鐘　金天翮
萍瀏醴起義檄文　龔春台
中国同盟会中部総会宣言
5　一国の革命方略―広東派
支那の保全・分割について合わせ論ず　孫文
△『保皇報』を駁する　孫文
中国問題の真の解決　孫文
東京留学生歓迎会における演説　孫文
三民主義と中国の前途　孫文
6　無政府主義
△社会主義講習会　劉師培他
△アジア現勢論　劉師培
△　付録　中国現勢論　劉師培
△女性解放問題　何震
7　その他
△マラ詩力説（抄）魯迅

新編　第4巻　世界大戦と国民形成：五四新文化運動

1　辛亥革命の挫折と反省
†Ⅳ①1　社会改良会発起宣言　李石曾
†Ⅳ①2　民彝と政治（抄）李大釗

旧編　第4冊　五四運動・国民革命の思想：五四運動から国民革命まで
1　辛亥革命の挫折と反省
△『越鐸』創刊の辞　魯迅
△わが民の悲運を哀しむ　李大釗

Ⅳ①3　心理建設（孫文学説）（抄）　孫文
2　新文化運動
(1) 伝統文化批判
Ⅳ②1　青年に告ぐ　陳独秀
Ⅳ②2　孔子の道と現代生活　陳独秀
Ⅳ②3　青春　李大釗
Ⅳ②4　新中華民族主義　李大釗
†Ⅳ②5　家族制度は専制主義の根拠である　呉虞
Ⅳ②6　体育の研究（抄）　毛沢東
Ⅳ②7　文学革命についての書簡　胡適
Ⅳ②8　中国今後の文字問題　銭玄同
Ⅳ②9　随感録38　魯迅
†Ⅳ②10　思想革命　周作人
Ⅳ②11　林琴南氏に答える（抄）蔡元培
†Ⅳ②12　『新潮』発刊主旨書　傅斯年
(2) 平民主義と「社団」
†Ⅳ②13　無政府共産党の目的と手段　師復
†Ⅳ②14　『勤工倹学伝』まえがき　李石曾
†Ⅳ②15　労働は神聖である！　蔡元培
†Ⅳ②16　工読互助団（抄）　王光祈
†Ⅳ②17　「新しき村」の精神　周作人
†Ⅳ②18　平民教育社宣言書　惲代英

△全国の父老に警告するの書　李大釗
△厭世心と自覚心　李大釗
精神建設（抄）―孫文学説　孫文
2　新文化運動
青年に告ぐ　陳独秀
孔子の道と現代生活　陳独秀
青春　李大釗
△狂人日記　魯迅
体育の研究（全文）　毛沢東
文学革命についての書簡　胡適
中国今後の文字問題　銭玄同
随感録38　魯迅
△随感録56、65、66　魯迅
林琴南氏に答える（全文）　蔡元培
随感録40　魯迅
3　五四運動
庶民の勝利　李大釗
五四運動諸宣言（抄）
(1) 学生のアピール
(2) 北京学生会宣言
△　(3) 上海商学工報各界連合会宣言
(4) 北京学生より日本国民に送る書

(3) 家庭・結婚・ジェンダー
Ⅳ②19　随感録40　魯迅
†Ⅳ②20「破壊と建設の時代」の女学生　謝冰心
†Ⅳ②21　模範家庭を社会進歩の中心に　黄藹
†Ⅳ②22　女性解放と改造に関する討議（抄）　向警予
†Ⅳ②23　産児制限と優生学　潘光旦
3　五四運動とその展開
Ⅳ③1　庶民の勝利　李大釗
Ⅳ③2　五四運動諸宣言（抄）
(1) 学生のアピール五四運動諸宣言
(2) 北京学生会宣言
(3) 北京学生より日本国民に送る書簡（抄）
†Ⅳ③3　再び「問題と主義」について　李大釗
Ⅳ③4　新思潮の意義　胡適
Ⅳ③5　民衆の大連合　毛沢東
†Ⅳ③6　毛沢東宛書簡　…プロレタリア独裁の主張　蔡和森
†Ⅳ③7　国家、政治、法律　鄭賢宗
†Ⅳ③8　我々の大敵はいったい誰なのか　施存統
4　国共合作と国民革命
†Ⅳ④1　省憲法運動の目標　張君勱
Ⅳ④2　中国共産党第二次全国大会宣言（抄）
Ⅳ④3　京漢鉄路労働組合総連合のストライキ宣言
△秘密外交と強盗世界　李大釗
△労働と教育の問題　李大釗
△青年と農村　李大釗
△「問題と主義」によせて　李大釗
新思潮の意義　胡適
△ノラは家出したあとどうなったか　魯迅
民衆の大連合　毛沢東
4　国共合作と国民革命
中国共産党第二次全国大会宣言（全文）
京漢鉄路労働組合総連合のストライキ宣言
△中国農民の現況とわれわれの運動方針　鄧中夏
思想界の連合戦線問題　鄧中夏
△中国共産党第三次全国大会宣言
中国国民党第一次全国代表大会宣言（全文）
△農民の大連合　孫文
耕すものに土地を　孫文
△犬養毅への書簡　孫文
中山主義の国民革命と世界革命　李大釗
△山東、河南、陝西…諸省における紅槍会　李大釗
灯下漫筆（全文）魯迅

Ⅳ④4　思想界の連合戦線問題　鄧中夏
Ⅳ④5　中国国民党第一次全国代表大会宣言（抄）
Ⅳ④6　耕すものに土地を　孫文
†Ⅳ④7　三民主義の哲学的淵源　戴季陶
Ⅳ④8　孫文主義における国民革命と世界革命　李大釗
Ⅳ④9　灯下漫筆（抄）　魯迅
5　アイデンティティを求めて
†Ⅳ⑤1　静の文明と動の文明　杜亜泉
†Ⅳ⑤2　第三種文明　張東蓀
†Ⅳ⑤3　欧遊心影録（抄）　梁啓超
†Ⅳ⑤4　東西文化およびその哲学（抄）　梁漱溟
†Ⅳ⑤5　人生観　張君勱
†Ⅳ⑤6　哲学と科学―張君勱の…評する（抄）　丁文江
†Ⅳ⑤7　雲南民族調査報告（抄）　楊成志
†Ⅳ⑤8　仏教源流およびその新運動（抄）　太虚
†Ⅳ⑤9　生活即教育（抄）　陶行知

新編　第5巻　国家建設と民族自救：国民革命・国共分裂から一致抗日へ
1　国民革命の展開と動態
Ⅴ①1　国民革命軍北伐出兵にあたり将士に告げる書　蔣介石
Ⅴ①2　湖南農民運動視察報告（抄）　毛沢東

旧編　第5冊　人民解放革命の思想（上）：毛澤東思想の形成と発展
〔旧編第5冊　章区分なし〕
中国社会諸階級の分析　毛沢東
湖南農民運動視察報告（全文）　毛沢東

Ⅴ①3　革命時代の文学―4月8日黄埔軍官…講演―　魯迅　革命時代の文学―4月8日黄埔軍官…講演―　魯迅〔旧4〕
Ⅴ①4　井岡山前敵委員会報告（抄）　毛沢東　湖南・江西省境地区各県第2回…決議案　毛沢東
Ⅴ①5　林彪同志あて書簡（抄）　毛沢東　中国共産党赤軍第四軍第9回…決議案　毛沢東
Ⅴ①6　中国無産階級革命文学と先駆者の血　魯迅　中国無産階級革命文学と前駆の血　魯迅〔旧6〕
2　南京国民政府の成立―訓政から憲政へ　当面の政治情勢と…決議（瓦窰堡決議）中国共産党〔旧6〕
†Ⅴ②1　訓政綱領　附録　訓政大綱提案…　中国国民党・胡漢民　「中国本位の文化建設」宣言　王新命ほか〔旧6〕
†Ⅴ②2　人権と約法　胡適　いわゆる「中国本位の文化建設」を試評す　胡適〔旧6〕
†Ⅴ②3　人権について（抄）　羅隆基　実践論―認識と実践の関係―知と行の関係　毛沢東
†Ⅴ②4　二つのモデル心理の瓦解　汪精衛　矛盾論　毛沢東
†Ⅴ②5　憲法と三民主義（抄）孫科
†Ⅴ②6　中国ファシズムの特殊性（抄）徐淵
†Ⅴ②7　革命と専制　蔣廷黻
†Ⅴ②8　再び建国と専制について　胡適
†Ⅴ②9　再び民主政治と独裁政治をめぐって　丁文江
†Ⅴ②10　国民の人格の養成　張熙若
3　満洲事変―統一、抗日、民主
†Ⅴ③1　一致して奮起し、共に滅亡の危機を救おう　蔣介石
†Ⅴ③2　中華民国国難救済会宣言
†Ⅴ③3　いわゆる「剿匪」問題　丁文江・胡適
†Ⅴ③4　中国民権保障同盟章程
†Ⅴ③5　新生活運動の要義　蔣介石
†Ⅴ③6　外国の侵略に抵抗し、民族を復興しよう（抄）　蔣介石

†Ⅴ③7　王世杰への書簡　胡適
　Ⅴ③8　当面の政治情勢…決議（瓦窰堡決議）（抄）　中国共産党
†Ⅴ③9　救国連合戦線に対する誤解　鄒韜奮
†Ⅴ③10　団結して…基本的条件と最低限の要求　沈鈞儒他
4　民族自救と文化・学術の地平
(1)　農村・都市・ジェンダー
†Ⅴ④1　中国民族自救運動の最後の覚醒（抄）　梁漱溟
†Ⅴ④2　郷村建設によって民族を復興する案　梁漱溟
†Ⅴ④3　中華平民教育促進会の定県における事業概要　晏陽初
†Ⅴ④4　都市を発展させ農村を救済する　呉景超
†Ⅴ④5　軟性映画論との総決算（抄）　唐納
†Ⅴ④6　女性は家庭に帰るべきか　李峙山
†Ⅴ④7　法律は感情を維持できるか　陳衡哲
†Ⅴ④8　女性と産児制限（抄）　劉王立明
(2)　科学と救国
†Ⅴ④9　中国の科学への取組　翁文灝
†Ⅴ④10　一年来の政治制度改革に関する議論（抄）　陳之邁
†Ⅴ④11　経済論争における二つの戦線（抄）　章乃器
†Ⅴ④12　中国社会性質問題論戦（抄）　何幹之
(3)　辺疆の危機
†Ⅴ④13　『東北史綱』巻首　傅斯年
†Ⅴ④14　『禹貢』発刊詞　顧頡剛

(4)　全面的西洋化および本位文化をめぐる論争
†Ⅴ④15　全面的西洋化の理由（抄）　陳序経
Ⅴ④16　中国本位の文化建設宣言　王新命他
Ⅴ④17　「中国本位の文化建設」なるものを試評する　胡適
†Ⅴ④18　全面的西洋化か、植民地化か　葉青
5　毛沢東の戦略と哲学
†Ⅴ⑤1　中国革命戦争の戦略問題（抄）　毛沢東
†Ⅴ⑤2　…抗日民族統一戦線の当面の段階…任務　毛沢東
Ⅴ⑤3　実践論　毛沢東
Ⅴ⑤4　矛盾統一法則（抄）　毛沢東

（第5冊の後半部分は第6巻の対照表へ続く）

新編　第6巻　救国と民主：抗日戦争から第二次世界大戦へ
1　全国抗戦と戦時体制構築
†Ⅵ①1　抗日救国十大綱領　毛沢東
†Ⅵ①2　わが軍の南京撤退について国民に告げる書　蔣介石
†Ⅵ①3　中国国民党臨時全国代表大会宣言　中国国民党
†Ⅵ①4　抗戦建国綱領　中国国民党
Ⅵ①5　持久戦論（抄）　毛沢東
†Ⅵ①6　国民参政会の任務　蔣介石
†Ⅵ①7　図書…検閲規則を撤廃し…出版の出由を…提案　鄒韜奮
†Ⅵ①8　現段階の女性運動に対する意見　鄧穎超
2　持久戦下の国家建設

旧編　第5冊　人民解放革命の思想（上）続き
1　国共分裂後の進路の模索
△革命文学をいかにして建設するか　李初梨
△牯嶺から東京へ（抄）　茅盾
△左翼作家連盟に対する意見　魯迅
△中国左翼作家連盟理論綱領
△暗黒中国の文芸界の現状　魯迅
△プロ大衆文芸の現実的問題　瞿秋白
2　抗日統一戦線運動の思想
△抗日救国のために…（八・一宣言）　中共中央
△国防・泥沼・煉獄　郭沫若

†Ⅵ②1　第一次南嶽軍事会議開会訓辞（抄）　蔣介石
†Ⅵ②2　敵国の陰謀…抗戦の国策（抄）　蔣介石
†Ⅵ②3　艶電　汪精衛
†Ⅵ②4　国民大会を召集し憲政を実行する案　国民参政会
†Ⅵ②5　三民主義の体系とその実行の順序　蔣介石
Ⅵ②6　新民主主義論（抄）　毛沢東
†Ⅵ②7　中国民主政団同盟成立宣言　民主政団同盟
3　第二次世界大戦の中の抗日戦争：戦後構想へ向けて
†Ⅵ③1　戦後中国の責任（抄）　陳果夫
Ⅵ③2　中国の命運（抄）　蔣介石
†Ⅵ③3　中国の憲政運動と世界の民主潮流　張志讓
†Ⅵ③4　二つの時代の人権運動の概論　張君勱
†Ⅵ③5　中国が憲政に到る道（抄）　梁漱溟
†Ⅵ③6　政治民主主義と経済民主主義　羅隆基
†Ⅵ③7　中国の工業化と民主は不可分である（抄）　馬寅初
†Ⅵ③8　世界が報道の自由へと到る道（抄）　馬星野
†Ⅵ③9　どのように民主を促進するのか　孫科
†Ⅵ③10　中国国民党第六回全国代表大会宣言　中国国民党
4　共産党統治区の思想・運動・展望
Ⅵ④1　学風・党風・文風を正そう（抄）　毛沢東
†　附録1　過ちを犯した者を速やかに救え（抄）　康生
†　附録2　搶救運動に関する意見書（抄）　蔣南翔
△トロツキー派に答える手紙　魯迅
△徐懋庸に答え、あわせて…　魯迅
持久戦について（抄）　毛沢東〔旧5〕
△われらの燈台　鄒韜奮
△中国大衆教育の問題（抄）　陶行知
3　抗日戦争と民族の進路
新民主主義論（全文）　毛沢東
中国の命運（抄）　蔣介石
△民主を妨害する、…論調をあばく　鄒韜奮
△民衆を組織することと大西南の防衛　聞一多
△五四運動の歴史法則　聞一多
学風・党風・文風を整えよう　毛沢東〔旧5〕
国際婦人デーに思う　丁玲
野百合の花　王実味
延安の文芸集会での講話　毛沢東〔旧5〕
△老三篇　人民に奉仕しよう　毛沢東〔旧5〕
△　ベチューンを憶う　毛沢東
△　愚公、山を移す　毛沢東

Ⅵ④2　国際女性デーに思う　丁玲
Ⅵ④3　山百合の花　王実味
Ⅵ④4　延安の文芸座談会での発言（抄）　毛沢東
†Ⅵ④5　指導方法の若干の問題について（抄）　毛沢東
†Ⅵ④6　中国共産党第七回全国代表大会開幕の辞　毛沢東
†Ⅵ④7　連合政府論（抄）　毛沢東
†Ⅵ④8　党規約の修正に関する報告（抄）　劉少奇
5　国民政府統治地区の文化と社会
(1) 科学と民主
†Ⅵ⑤1　科学世界と建国の前途（抄）　朱家驊
†Ⅵ⑤2　西流への手紙　陳独秀
†Ⅵ⑤3　憲政の道（抄）　楊兆龍
(2) 中国アイデンティティを求めて
†Ⅵ⑤4　中華民族は一つ（抄）顧頡剛
†Ⅵ⑤5　民族主義と20世紀―歴史形態の観点から（抄）　林同済
†Ⅵ⑤6　新理学（抄）　馮友蘭
†Ⅵ⑤7　読経示要（抄）　熊十力
†Ⅵ⑤8　抗戦時期の西洋化問題（抄）　陳序経
(3) 女性と戦争
†Ⅵ⑤9「破鞋」問題について　劉英
†Ⅵ⑤10　誰が家庭教育の責任を負うべきか　劉蘅静
†Ⅵ⑤11　戦後の婚姻問題（抄）　陳盛清

新編　第７巻　世界冷戦のなかの選択：内戦から社会主義建設へ
1 「惨勝」と戦後中国への展望
　Ⅶ①1　抗日戦争勝利後の新情勢と新任務　毛沢東
†Ⅶ①2　抗戦勝利慶祝のラジオ演説（抄）　蔣介石
†Ⅶ①3　中国民主同盟臨時全国代表大会政治報告（抄）　羅隆基
†Ⅶ①4　政治的民主と経済的自由　胡秋原
†Ⅶ①5　共産党について　儲安平
　Ⅶ①6　日本降伏以後の中国の政局の決算　鄭振鐸
†Ⅶ①7　中国の時局の前途についての三つの方向　王芸生
†Ⅶ①8　民主について（抄）　蕭公権
2　自由主義と中間路線
†Ⅶ②1　中国の政局　儲安平
†Ⅶ②2　中間派の政治路線（抄）　施復亮
†Ⅶ②3 「第三方面」と民主運動を論ずる（抄）　李平心
†Ⅶ②4　自由主義者はどこへ行くのか（抄）　楊人楩
†Ⅶ②5　自由主義者の信念―妥協・日和見・中間路線を退ける　蕭乾
†Ⅶ②6 「公然と政府に反対する」について　楼邦彦
†Ⅶ②7　自由主義　胡適
3　憲政論議と中国文化
†Ⅶ③1　選災を予告し、憲政を追論する　上・下（抄）　梁漱溟
†Ⅶ③2　私も憲政を追論し、あわせて文化の診断に及ぶ　張東蓀

旧編　第６冊　人民解放革命の思想（下）
4 「惨勝」と新中国への展望
　抗日戦争勝利後の時局と…方針　毛沢東
　日本降伏以後の中国の政局の決算　鄭振鐸
　アンナ・ルイズ・ストロングとの談話　毛沢東
△民権を戦いとり、民権を防衛しよう　鄭振鐸
△アメリカの反動派は、ヒットラーの道…　翦伯賛
△山西・綏遠解放区幹部会議での講話　毛沢東
△…第７期…第２回全体会議での報告　毛沢東
△六たび白書を評す　毛沢東

†Ⅶ③3　再び双軌政治を論ずる　費孝通
†Ⅶ③4　憲政を論ずる　梁実秋
†Ⅶ③5　民族文化の新しい見方　蔡尚思
4　中国社会の省察
†Ⅶ④1　（一）紳士について―「社会構造から中国をみる」その1　費孝通
　　（二）皇帝の権力について　呉晗
†Ⅶ④2　（一）文字下郷　費孝通
　　（二）差異序列の社会構造　費孝通
†Ⅶ④3　学と政と党（抄）　潘光旦
†Ⅶ④4　潘光旦氏の女性問題の論文を読んで　黄碧遙
†Ⅶ④5　女性と団結　謝冰瑩
†Ⅶ④6　中国の過去と将来（抄）　張東蓀
5「人民解放戦争」と中華人民共和国の成立
　Ⅶ⑤1　毛沢東、世界の情勢を語る（抄）　アンナ・ルイーズ・ストロング
†附録　米ソに対する我々の態度（抄）　傅雷
†Ⅶ⑤2　中国人民解放軍宣言　毛沢東
†Ⅶ⑤3　農民に告げる書　晋察冀辺区農会臨時代表会
†Ⅶ⑤4　内戦論（抄）　楊人楩
†Ⅶ⑤5　目下の土地問題について　笪移今
†Ⅶ⑤6　中国社会経済研究会の初歩的主張　中国社会経済研究会
†Ⅶ⑤7　人民民主独裁について（抄）　毛沢東
†Ⅶ⑤8　統一戦線・人民戦線・共同綱領（抄）　銭端升

†Ⅶ⑤9　いかにして新しい社会の新しい女性になるか　区夢覚
†Ⅶ⑤10　アメリカの心理を診断する（抄）　潘光旦
6　思想改造
†Ⅶ⑥1　私のこの一年　費孝通
†Ⅶ⑥2　完全な革命派になろう（抄）　毛沢東
†Ⅶ⑥3　土地改革活動に参加して得たもの　呉景超
†Ⅶ⑥4　中国社会科学工作者の任務（抄）　陶孟和
†Ⅶ⑥5　陶行知先生による「武訓精神」賞揚に積極的意味はあるか　楊耳
†Ⅶ⑥6　誤りは私の「教育」的観点にある　董渭川
†Ⅶ⑥7「生活即教育、社会即学校」を評する　張凌光
†Ⅶ⑥8　知識人の改造問題について（抄）　周恩来
†Ⅶ⑥9　科学工作者はどのように「新我」の闘争を展開すべきか（抄）范文瀾
7　新民主主義から社会主義的改造へ
†Ⅶ⑦1　中国は建設期に入っていかねばならない（抄）劉少奇
†Ⅶ⑦2　三反・五反運動についての指示　毛沢東
†Ⅶ⑦3　私たちの反省（抄）胡縄・于光遠他
†Ⅶ⑦4　中国の社会主義への移行と全国人民代表大会開催問題　劉少奇
†Ⅶ⑦5　過渡期の総路線についての中央政治局会議における講話　毛沢東
†Ⅶ⑦6　過渡期の総路線について（抄）周恩来
†Ⅶ⑦7　人民政治協商会議常務委員会拡大会議における発言草稿　梁漱溟
†Ⅶ⑦8　梁漱溟の反動思想を批判する（抄）毛沢東